

吉隠よなばりの

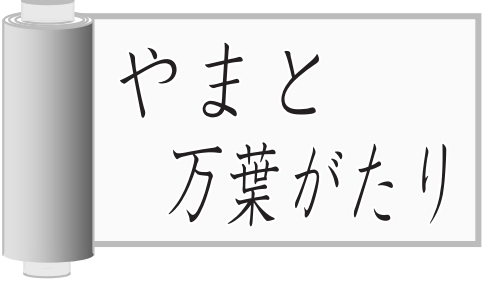
猪養かひの山に 伏す鹿の

婦呼しよぶ声こゑを 聞くが羨あやむしさ

大伴坂上郎女おほのともさねのいらぬめ（巻八・一五六一）

この歌は、題詞によ
ると、大伴坂上郎女が
跡見とみの田庄たぢやうにいた時
に作った歌です。跡見
の田庄とは、現在の桜
井市外山とほ付近にあった
とみられる大伴氏の田
地経営施設で、跡見
庄ぢやうとも呼ばれました。
大伴氏の田庄は、跡見
の他に竹田（現在の檀
原市東竹田町付近）に
もあり、いずれも飛鳥

・藤原旧京の近郊に立
地します。これらは、
坂上郎女の父である大
伴安麻呂が壬申の乱の
勲功などにより賜った
所領と考えられ、安麻
呂の妻である石川郎
女が大刀自おとぢ（家政をつ
かさどる女性）として
その経営に携わり、後
には安麻呂と石川郎
女の子である大伴稻いな公
や坂上郎女らが田庄



やまと
万葉がたり

の経営を引き継ぎまし
た。坂上郎女の自宅
は平城京北郊の坂上
里にありましたが、秋
の収穫期には数カ月
にわたって跡見や竹田
の田庄に滞在していま
した。

の経営を引き継ぎまし
ている自らの孤独を
重ねたものです。鹿の
鳴き声が聞こえたとい
う吉隠（現在の桜井市
吉隠付近）は、初瀬川
の支流である吉隠川の
源流一帯に当たり、跡
見からは東へ約7キロ離
れています。吉隠の地
は、大和盆地から東へ

隠にあるなど、皇族や
貴族の葬地でもありま
した。こうしたことか
ら、山に隠れた寂しい
土地という吉隠の印象
が生じたとみられま
す。山中から声を響か
せた鹿の姿は跡見庄か
らは見えなかったはず
ですが、寂寥感せまじゆうを呼
び起こす吉隠の地が寂
しげな鳴き声を発する
鹿のすみかにふさわし
いと坂上郎女は考えた
のでしょう。
（泉立万葉文化館主任
研究員・竹内亮）

【訳】吉隠の猪養の山に伏している鹿が
妻を呼ぶ声を聞くのは心ひかれることだ。